



盛装でのオン・ステージ

リサイタル 顛末記

1988年4月14日、ウィーンでリサイタルを行った。場所はムジークフェラインのブラームス・ホール。

この世の演奏家、腹の底では皆そう思っているに違いないとふんではいるのだが、自分の住んでいる街で演奏会を開催するのが何とい

っても一番しんどい。私にとっては東京とウィーンでのリサイタルがそれに当る。

演奏の仕事をビジネスベースで円滑に運ぶためには、マネージメントの助けを借りるのが普通だ。大きなマネージメントになればなるほど国際的なコネクションも多く、世界を股にかけた活躍が可能となる。

でもここでよく考えてみよう。世界広しといえどもクラシックの演奏会が商業的にも充分成り立つ都市の数にはやはり限度がある。そしてそれらの都市のホールで催される演奏会は、何もピアノリサイ

当日のプログラム



タルばかりではない。オペラ、オーケストラ、歌、室内楽、バレエ等々、バラエティーには事かかない。それに対して一人前に飯の食えるプロたらん、としてチャンスを虎視眈々と狙うピアニストは、全世界でどれだけいるだろう。

国際コンクールを通じて選ばされる超エリートも「毎年」数十人という数である。十年たてば数百人。みな国際音楽市場で空席がでるのを今か今かと期待しているにもかかわらず、幸か不幸か音楽家には健康な人が多く、老齢になってもかくしゃくとして元気な人がばかり……。

閑話休題、演奏会を行う場合、見知らぬ土地に行ったほうが気楽、というのは事実である。旅費、滞在費、など経費はかかるにしてもそれは招待側の負担、あるいは自前としてもそれに見合うだけの収入が契約によって保障される。極端な話、たとえチケットが1枚も売れていなくとも、ガランとしたホールで予定されたプログラムを演奏しさえすればお金はもらえる。

一方、自分の本拠地で演奏会をするとなると、経費はかからぬ、知人は多い、その他たくさんのお客様がありそうながら、そうはうまく問屋がおろさぬケースが少なくない。

いつでも聞ける地元の人よりも、はるばると訪れた外来演奏家を聞いてみたい、と思う聴衆の微妙な心理も作用する。東京に住んでいるながら東京タワーに登った経験のない人が多いのと同じである。そして運悪くかんばしくない批評が出たりすると、後々までそのダメージが精神的に尾をひきやすい。

よし、儲け話を待っていても仕方がない、ここはひとつ自分で思うようなコンサートを自力でやってみよう、と思いついて計画した今回のリサイタルだったが、その

準備の何たる繁雑さ……。普段は裏方さんとして全ての準備を請け負ってくれるマネージャーの有難さを身にしみて感じる貴重な経験となった。

当夜のプログラムは邦人作品で開始する事にした。ヨーロッパでコンサートをすると「なぜ日本の作品を演奏しないのですか？」と問われる事が少なくないが、現実問題としてはその選曲が難しい。

いわゆる現代曲を演奏したのでは音響がインターナショナルすぎて、いったいそのどこが日本的なのか、とのクレームがつきやすい。かといって日本情緒の綿々とした作品は、他の作品と馴染みにくい。今回選んだのは諸井誠の「ノクターン」、三善晃の「組曲こんな時に」と穴戸睦郎の「トッカータ」

という組み合わせであった。全部あわせても15分ぐらいただし、何ととっても耳に快い。ただし日本を代表する作曲家諸氏にとっては、その主要作品をあえて避けた、という申しわけない選曲となつてしまった。

そのあとにショパンの2番のソナタ、休憩後にはドビュッシーのプレリュード1巻全曲、というウィーンには縁もゆかりもないプログラム構成だったが、評判はまずまず。

ウィーンで不用意にモーツァルトやシューベルトを演奏する事によって「日本人は何事もよく真似る能力に長けている」などといった腹の立つコメントを貰うのだけは極力避けよう、との意図も多分に事か運び、めでたい幕切れとなった。



広告塔の前で。うしろは自然史博物館



無事にリサイタルを終えて